

あまのこ

中国訪問団長を拝命して

吉 永 洲 神

三度目は断り切れずお受けすることにした団長役、お受けするから本学院として訪れた事のない旅順の日露戦跡巡礼の旅を優先したいと申し上げたところ総裁から「団長のご自由に」とのご託宣を得て、いよいよ本決まりとなった。

「サア大変だ。責任は重大だぞ」密かに思う。

全国大会から一日置いて中国行きとなった昨年のような無理な計画は樹てたくない。正月を過ぎると、そろそろ活動が始まる。まず旅行会社の選定だ。古田事務長に指示して五社の相見積りを採る。その中から二社を選び更に見積りを採る。成田への集合時刻、成田から帰宅される時間など勘案の上、一社に絞って、全行程及び予算を精査の上、総裁の決裁を仰いだ結果がこの度の旅程となった次第である。

一方で「日露戦跡巡礼の旅」の資料を蒐め、事務所でコピー編集し、その葉とした。

再三に亘る旅行会社との詰めを経ていよいよ出発となる。成田で名古屋組と合流した我々五十名は、本旅行の無事を祈って機上の人となり、空路二時間四十分のフライトの後、夕闇迫る大連空港に降り立つ。此処で鹿児島組と合流し総勢五十五名となる。出迎えたガイドの王邦文日本外連部長の案内で、バスに分乗して高台にある大連テレビ塔下のレストランで、夕食を認めた後ホテルに向かう。玄関の電光掲示板に「日本吟道学院熱烈歓迎」とあるを見て、その気配りに感謝する。

さあ、明日はいよいよ旅順だ。
以下細部は、新村・佐藤両氏の紀行文に譲る事にして、印象的な事柄を記したい。

一、日露の激戦地二〇三高地での献吟は、天に在します英霊に届けとばかりの大合吟であり、真に意義あるものであった。

私は、昭和十六年五月、平成八年五月と今度で三度目であるが、詣でるたびに整備され、禿山だった同高地は、樹木生い茂る一大観光地となっている事は、中国側の観光資源としての力の入れようを目のあたりにした思いである。

一、馬鞍山市南湖賓館（ホテル）に着いたのは、夕刻であったが、同市長始め中国要人が増列して出迎えて下されたのには、恐縮すると共に感激した。

感激したのはそればかりではない。ホテル出発から諸行事を経てホテルまで、終始パトカー・警備艇による警護を頂いた事である。また、李白墓苑での植樹式に、中国側は大変喜ばれ、資料館などを見学して廻る私共を先回りして待機しておられる蔡副県長始め要人の方の気配りである。諸行事を終えてホテルに戻れば、全員に馬鞍山市からのお土産が配られていた。

事ほどさように中国側の私共一行に対する配慮は、総て懇ろであり流石儒教発祥の地だナとしみじみ感懐に浸るの

会報 第二十九号

発行日 平成十四年十二月十三日
編集人 南洲吟道会広報局
発行人 理事長 吉 永 洲 神
発行所 〒六五〇〇五 東京都中野区白鷺二一三四一五
(社) 日本吟道学院南洲吟道会
☎・FAX 〇三(三三三三〇)七〇〇九

であった。
団長を務めたが為に、最も多くの本会会員の皆様に参加されたことに、誌上をお借りして厚く御礼申し上げます。
有難うございました。
(理事長)

本部だより



平成十四年度秋季昇段審査 結果報告

十月二十日(日)本会秋季昇段審査会が、中野区白鷺会館に於て肅々と実施され、次のとおり審査決定されました。また、千葉地区の審査会は、十九日(土)に船橋市市民文化ホールにて実施されました。

少年の部		二級	二名	計	二名
		三級	三名	計	二名
一 般 の 部					
初段	三名	中伝	八名	二段	五名
二段	二名	五段	三名	準師範	六名
初伝	二名	六段	五名	師範	二名
三段	六名	奥伝	九名	計	五十一名
四段	七名	七段	一名		
皆伝	十名	総伝	七名		
九段	二名	助教授	名		
秀伝	三名	教授	二名		
十段	一名	範師	名		
				計	二十五名
					総本部審査委員 会をへて昇段

(指導局)

平成十五年度春季温習会のお知らせ

平成十五年春季温習会が次のとおり決定いたしました。
皆様、スタンバイして下さい。

と き……平成十五年5月11日(日) 10時～17時
と ころ……中野区野方区民ホール
(西武新宿線・野方駅下車徒歩3分)

☆ 教場名変更のお知らせ (14・9・1付)

熟 年 教 場 改 め 白 鷺 教 場
習 志 野 会 改 め 習 志 野 会 第 一 教 場
同 会 小 田 代 教 場 改 め 習 志 野 会 第 二 教 場

☆新入会員ご紹介 どうぞよろしく!!

- 中村美津代(白鷺) 会員No.六八二(14・9・4付)
 〒一六五―〇〇三三 中野区若宮三―四一―四 ☎〇三―三三―〇一―二二七八
 協屋 孝一(習志野会第二) 会員No.六八三(14・11・1付)
 〒二七五―〇〇二六 習志野市谷津五―三六―一八―二〇四 ☎〇四七―四七八―八八〇八

☆住所変更のお知らせ

次の方が住所又は電話番号を変更されました。お手持ちの名簿を修正または追記して下さい。

- 増田 弘磨(本会顧問)
 〒一六五―〇〇三五 中野区白鷺二―一三―二六 増田法律事務所
 ☎〇三―五三―二七―六七五〇
 FAX〇三―五三―二七―六七五一
 持永 泰洲
 〒二七五―〇〇二六 習志野市谷津四―五―二五 ☎〇四七―四五三―四九〇二
 宝方 孝祥
 宝方 恵龍
 〒一九三―〇八〇一 八王子市川口町一五四〇 四七七 ☎〇四二六 五四―六六三二

またもや吟士権者誕生!!

おめでとつございます。

去る十二月一日(日)江戸川区総合区民ホールに於いて、指導者名吟大会並びに吟士権者選抜大会が開催された。本会から30名の応援団を得て、33名が出演、4名が吟士権選抜に臨んだ。

漢詩奥伝以上の部

- 優勝 菊田 正龍(龍陽会②)
 四位 村田 重祥(船橋)

新体詩の部

- 準優勝 平松 玉祥(いずみ会)
 三位 有坂 龍煌(龍陽会①)

右の成果を収めた。更に審査員選考会議の結果、平成14年度漢詩の部吟士権者に次の方が認定された。

- 菊田 正龍(龍陽会②)



初めまして

秋田吟道会 加藤 明龍

皆様初めまして、秋田吟道会副会長、加藤明龍です。と申しましても娘杏城が南洲吟道会でお世話になっている関係で準会員のように親しくさせて頂いております。

私は北海道出身で結婚を機に秋田に住み二十七年になります。仕事は、乳児保育園で保育士をしております、毎日子供相手に園の中を走り回っています。

吟暦だけ数えると三十年。でも、子育て中は休んでおりませんし、本当に身を入れて勉強するようになったのは二十年程でしょうか。そのきっかけは、吉永先生との出会いです。

秋田吟道会十周年記念大会で学院本部から応援に来ていただきました龍陽先生の吟を聞いた時、感動で身体が震え知らず知らず涙が溢れていました。そして、その時「コレダ!!」と決めたのです。

更に偶然は続きました。二、三年前ごとに洲神先生・龍陽先生・旭龍先生の指導を受ける機会に恵まれ、私の吟熱は上がる一方でした。そんな中で、自分の勉強不足を知る事になりました。

それは、第二十八回日本吟道全国大会に推薦吟詠者として出させていただいた時、また、本学院法人化十周年記念事業でビデオ名吟選に選ばれ、生まれて初めてレコーディングをした時、まだまだ他にもありますが、ご指導して下さる先生の言葉を理解出来なかったり、節調が充分練習したはずなのに中央と地方では異なっていたりしました。

「とにかく田舎の中で、自己流で吟じているだけではダメ、もっともっと勉強をしなくては!」と、更に私の吟熱に火を付けました。龍陽先生に憧れ、「一生懸命勉強中です。仲間の付きました。龍陽先生に憧れ、一生懸命勉強中です。仲間の応援があり、秋田吟道会会長佐藤先生の暖かい励ましが有り、そして何より一番の理解者が家族です。

おかげさまで、平成十三年度吟士権者に認定していただきました。娘、杏城も私が指導していた時とは別人のように上手にしていただき、吉永両先生には感謝の気持ちでいっぱいです。そして年に一度、女流吟道大会に親子で出吟させて頂いた事が一番の心の安らぎです。

どうか今後とも、親子ともどもよろしく御指導下さい。

最近の嬉しきできごと

小泉 龍泰

生来どちらかといえば横着な私は、一成らぬは人の為さぬなりけり」を実感している。

人は先ず夢を持つことから希望が沸き、夢の実現に向って行動しようという勇気が生れる。そして挑戦した結果に反省

が加わり、新たな夢を持つようになるのだそうであるが行うは難しである。最近では夢も持てなくなり、それを自分の年齢や世情のせいにして、ひどく悲観的であったり、消極的な考え方に落ち込んでいる。

ところが、今春八十三歳にして夢を実現された方が身近におられる。中町会の松橋春城さんである。

詩吟が契機となり、お若い頃に習われた日舞長唄の世界に再挑戦なさり、ついに念願かなって板東流名取り板東三雅弥さんの誕生となった次第である。昨夏の舞台で、かつらをつ

け、顔師の施した舞姿の松橋弥生さんは凜として美しく、その気迫に三顧され、大いなる元気を頂戴した思いであった。私はその感動を少しでも詩にとどめおきたい衝動にかられて、試験合格の朗報に接した時、人生の大先輩に何と僭越なと思ひ乍ら作詩させていただくことになった。

「為せば成る」を体現された「気の力」を、私も今後の日常の中に前向きに取り込んでいかなければ生涯現役の夢は叶えられぬと思う昨今である。

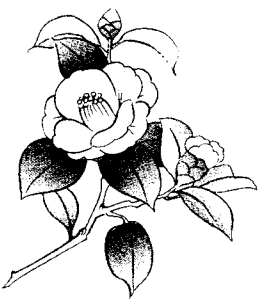
坂東三雅弥さんへ

祝辞に代えて 中町会 小泉 龍泰

弥生三月大願成 雅会欣欣師友情

矍鑠容姿身尚健 板東門下万雷轟

下平声八庚韻



七十の手習い

洲神会第一 阿久根 悠吟

昨年九月末、五十年にも及ぶ会社生活に終止符を打った。顧みれば、高度成長時代であり、さしたる能力が無くてもただ只管に前へ向かって進めば良い年月であった。

しかし、いったん歩を止めると、これといった趣味・道楽を持たぬ身には日は長い。このような時に同期生会があり、久しぶりに五十数年来の友である吉永洲神師に会い、何気なく、吟でも始めようか、と言ってしまった。

十一月半ば、洲神南洲吟道会第一に顔を出した処、先輩方の素晴らしい吟詠に驚かされた。よく考えてみると、小学校時代から唱歌は最も得意な科目であったことを思い出し、自分の軽率さを恥じた。しかし、一旦約束した以上、後には退けない。こうして、七十の手習いが始まった次第である。

吉永洲神師との交友は昭和十九年四月、桜花舞う広島鯉城台下の入学式に始まる。全国から集まった優れた友二四〇名との交わりは堅く、又人生最大の幸せである。

陸軍幼年学校の生活は一年六ヶ月（終戦により復員）で終わったが、全寮制であり、四六時中、勉学・体育・起居を共にしたため、ほとんどの人名、出身地、出身校を記憶しており、五十八年を経た現在も恩師を中心とした結束は堅く一言も否めない。

ともあれ、南洲吟道会に入門して六ヶ月、温習会・昇段審査会・全国大会・南洲吟道会研修会と吟詠の進歩は遅々として進まぬものの、矢継ぎ早やの行事に少々翻弄されている。

しかし、先輩の皆さんとの交流も広がり、色々のアドバイスを頂きながら、楽しく過ごしている日々である。温習会・昇段審査会での私の吟を先輩方が録音し、テープを頂いた。恐る恐る聴いてみたら、誠に拙劣、節度メリハリが無く、自分の怠惰、優柔な性格がそのまま出ており、深く恥じている次第。これにめげず、一步一步進んでいきたいと考えております。どうか今後とも皆様の暖かい声援また厳しいご指導をお願い申し上げます。

壮心吟道大会に出場して

中町会 船橋 春城

平成十四年九月二十九日、大塚ホールにて壮心吟道大会が開催されました。私は八十三歳なので出席させていただきま

した。九十五歳の後藤智祥さんはダイヤモンド表彰をお受けになりました。休憩のとき、廊下を背を曲げて歩んでおられた方が、舞台では杖も持たず、立派に立って表彰をお受けになられたのに感動いたしました。私はシルバー表彰を頂きました。また、合吟の部に出吟なさった南洲吟道会の平松誠城さんは、舌癌の大病を克服しての出吟でしたが、大病をなさった方とは思われぬ見事な吟声で、中町会の坂本憲水さんと「瀟流」を吟じられたのに感動いたしました。

それに反して、私は大変な失敗をしてしまいました。

私の吟題は「別詩」でした。途中「……別れを作す」と吟じたその途端、咳き込んでしまいました。そして、咳をとめようと息を飲んだ瞬間、詩文を忘れ立ちすくんでしまったのです。

その時、舞台袖から「昔（むかし）」と声を掛けて下さった方がいました。ハッと気が付き「昔去るとき……」と終わるまで吟ずることができ、ほっといたしました。お声を掛けてくださいました方、ありがとうございます。御礼申し上げます。もしあの時、お声を掛けてくださる方が居なかったらと思うと身の縮む思いがいたします。二度と失敗を繰り返すまいと心に誓っております。

壮心大会も終わりに近い頃、吉永洲神先生がサムエル・ウルマン作の「青春抄」を素晴らしい吟声で堂々と吟じてくださいました。最高の詩吟に感激いたしました。会場内万雷の拍手が鳴り止まず、改めて吟道の素晴らしさを感じた私です。

吟道にまだまだ未熟な私、最高の先生である吉永先生にご指導いただけて本当に幸せ者です。

先生、これからもお身体をお大切に。吟道に精進いたします私達のご指導をよろしくお願い申し上げます。

習志野会合同小旅行に参加して

習志野第一教場 小坂 正城

私は、今年八月に四十年間お世話になった会社を定年退社しました。大過なく頑張った自分への褒美の意味も含めて「中国国際吟詩節参加並びに日露戦跡巡礼の旅」へ参加することにしましたが、体調不良により、残念ながら参加を辞退し、加えて習志野会のお稽古も三ヶ月間休んでしまいました。吉永理事長先生そして広瀬先生にご迷惑をかけ誠に申し訳ありませんでした。

教場に復帰して早々の、十一月十日（日）に習志野会第一、第二教場合同の小旅行が行われ、久しぶりでもあり喜んで参加



の歓迎を受け、緊張した面持で席へと案内される。色とりどりの綺麗な花で飾られたステージの前に私達の席があり、青空の会場も気持よかった。

大会は市長始め韓国・日本と順を追って挨拶があり、我々の団長洲神理事長の挨拶は、中国語で呼びかけられ李白ゆかりの地で吟が出来る幸せを話された。現地の人達の拍手喝采がひときは大きく感じました。それから李白にちなんだ歌や踊りがあり、吟は日本吟道学院の先生方が次々と披露され、特に龍陽会長の『峨眉山月の歌』と洲神理事長の『偶成』は中国語の朗誦と日本式の吟詠であり素晴らしく、会場がシーンとなるほどでした。台吟の男子の部と女子の部は、意気の合った出来栄で、会場の青空の下晴れやかな雰囲気包まれていました。



李白墓苑植樹式の洲神理事長と龍陽会長

大会を終え、李白の墓に詣で献吟をした後、墓苑の庭で安徽省当塗県一蔡副県長一他中国要人参列の下厳かに植樹式が行われた。植樹は本学院としては初めての事であり、本学院から贈る記念品に代えて「植樹」にしたのは洲神団長のアイデアとのこと、中国側では大変喜ばれたという。銀杏の木、雌雄二本の植樹であり、皆で代わる代わる土をかけ水をやりました。健やかな成長を祈りつつ。それから安徽省の歓迎レセプションを経て、船で長江を一時間半程遡り、待望の天門山を望めば、東梁と西梁の山は低く、河幅も広く、李白が詠んだ当時とは程遠い年月を感じました。

丁度、将に太陽の沈む処が眺められ、船上から、『天門山を望む』を長江の彼方まで届けとばかりに、皆で吟じ終えて各々満足した顔になっていた。途中船上で、中国の歌や舞などの演し物あり、中国独特の発声は真に見事でした。これに応えて我が方も日本の歌で、中国でも歌われている「北国の春」等を皆で歌い、交歓演芸大会は正にその極に達しました。三時間四十分の長江上り下りの間、ピタリと付き添う警備艇。七時三十分ホテル発から吟詩節会場、李白墓苑、レセプション、長江遊覧、ホテルまで終始先導されたパトカーの乗員に感謝の拍手を送り、中国の皆様が熱烈歓迎に感謝しつつ、十四日の行事を終えました。洲神団長は、多々辛苦了（大変ご苦労さま）の挨拶と共に乗員に握手されました。

十五日は、南京から上海まで汽車で移動。それは二階建の列車で、酒盛りが始まり余興で盛り上がり上がっている時に突然階下にいたイタリアの団体の人達が飛込んで来て日伊交歓演芸会となり、笑い転げている間に上海に到着した。全く予期しない、国際交流の楽しい汽車の旅でした。

上海での市内見学は玉仏寺のミヤンマーから送られたとい

う白玉製の玉仏・釈迦像は、美しく何時までも眺めていたい気持ちでしたが慌しく次に移動。少ない時間で買物。今度はヨーロッパ調の建物が一杯の外灘（バンド）の夜景を見学、これは一見に値する素晴らしい眺めでした。最後の晚餐を終えてから、上海雑技団を見学。しなやかな肉体と強靱な筋肉で支える技は実にすばらしかった。上海で生まれ育ったという湊山牙祥さんの胸中は如何ばかりかと想い廻らし乍ら夢路を辿る。

十六日、六日間の旅を終えて帰国の途へ。

早朝バイキング形式の朝食を終えて、鹿児島組の皆様と別れを惜しみつゝバスで上海空港着。すっかり近代化された上海の街並は聞きしに勝る素晴らしさであり、至る処に新宿のノッポビルがある様なもので感心した。

遅れて十時上海発、空路成田へ。機中で位置を示すナビゲーションに日本領空に入った事を知りホッと安堵する。十二時四十五分無事成田着陸。洲神団長の解団の挨拶の後、参加者一同帰途につくが、本会参加者十三名は一席を設けて打上げとなる。橋本龍清副会長の「今迄の団長にはない含蓄のある中国語を交えての挨拶、吟詠等素晴らしかった。」とのお挨拶の後乾杯、暫し懇談の後帰途につく。素晴らしかった中国旅行の想い出を胸に。



南洲異説

上村 健 祥

西郷南洲に関する史論、史説は一般に伝えられている以外に数多く、又、今日に於てもなお引き続き論ぜられている。その中の特異なものについて概要を述べてみる。

一、「西郷星」

①城山で西郷自刃の直後から、鹿児島上空に夜ごとに見馴れぬ星が現れたのを見立て、「西郷星」と呼ぶことが広まった。その星の中に西郷の姿を挿入見立てて崇拜熱となり、西郷生存説を生み出すことになった。（『南洲残影』）

②八月二十三日、薩摩軍は熊本から転進し三田井を経て鹿児島を目ざし、山路を越えて小林に入った。この頃、東京や大阪で毎夜東方の空に「八時頃から大なる星煌々として顕わる。夜更けになるに従い、明らかなること鏡の如し。識者は是を見んとて千里鏡を以て写せしが、其形人にして大礼服を着し、右手に新政厚徳の旗を携え、儼然として馬上にあり、衆人拜して西郷星と稱し、信ずる者少なからず」と、八月二十三日「西南珍聞」に記された。勿論、西郷自身の知るところではなかった。しかし、「何時の間にか天に昇り星になった」とも云われていた。

③明治十年九月二十四日、城山で西郷非業の最後を遂げた後、鹿児島の上空に夜ごとに見馴れぬ星が現われ、数日間互って青白い光芒を放ち続けたと云う。人々は星を仰いで西郷隆盛を懐かしみ、誰云うとなく「西郷星じゃ」と囁き合っ

て故人の徳を偲んだと云う。但し、正史には記録されてい

ない。「天命を知る」)

④明治二十年代から三十年代、中国の志士たちは「西郷星」に関連して、西郷、福沢を新日本の偉大な指導者として、詩文に書いて評価している。

⑤司馬遼太郎は西郷の死後のこととして「民間で西郷星が語られた」ことを記している。「翔ぶが如く」

以上、異説「西郷星」は西郷が死んだ直後、或いはそれ以前なお生死の判らぬ時期に、しかも鹿児島だけでなく東京、大阪でも発生しているのである。そして、その崇拜熱が次第に生存説を生み出す土壌となった。

二、西郷の最後は射殺

西郷は自決したのではなく、腹心の桐野利秋から鉄砲で撃たれて殺されたことになっている。

桐野は今はいくまでと覚悟を決め、西郷の後姿に黙礼し、心に罪を謝しつゝ、涙をのんで西郷を鉄砲で撃つたのである、と云うのである。この説の著者(竹崎桜岳)の父親が、別府晋介の従者であった城川という人に聞いた話だという。

司馬遼太郎もその著「翔ぶが如く」でこの説を紹介している。その桐野については、岩崎谷を悠々と進みながら少しも屈する色はなく、自ら銃を手に敵を狙撃し……そのうち一発の銃弾がその右額に命中、顔面を朱に染め更に刀を揮って敵に当たろうとしたが、遂に倒れ伏した。四十歳。戦いがすべて終わったのは午前九時、薩摩軍の戦死者は西郷以下一五七名、官軍に投降した者二百余名であった。(「天命を知る」)

三、頭骨の発見

昭和五十年、西郷の首ではあるまいか、という頭骨が鹿児島島の吉野の墓地で発見され、新聞などで紹介され話題を呼んだ。もともと西郷は、城山の岩崎谷口の入口へ下る道中で死んだ。遺骸は放置されたが、首だけは従僕吉左エ門が布に包み、銃弾が飛来する中を駆け回って、島津忠吉邸の門前の石段の左側に埋めたことになっている。しかし、政府軍によって発見された場所は、折田正助邸の前の溝川の近くであったことになっている。鹿児島大学でその頭骨を鑑定したところ「推定年齢五十歳、屈強の男性」と結論が出たので騒ぎが大きくなった。

西郷の生存説には、山県等が首実検した首が偽ものである必要がある、この話などは昭和の現在に至るまで生存説が尾を引いている証拠とも云えるように、西郷は、今なお風化していないと云うところかも。

四、生存説

①ロシア亡命後、明治三十四年のロシア皇太子の訪日に当たって、西郷の随行説については既に述べたところであるが、別の亡命説として、ペトログラードで西郷に会ったという人があり、新聞に載った。

それは四国の木崎という商人が、ロシアと商取引をしていたので商用でペトログラードを訪れた時、冬宮の前で近衛師団が練兵を行っていた。その時の師団長が、恰幅から西郷さんによく知っている。この木崎某は、日本に居た頃西郷さんをよく知っていた。練兵が小休止になって休んでいるのでそばによって、よくよく見ると西郷さんに間違いないので「失礼ですが西郷さんではございませんか」と問うたら「実は、西郷だ」と。それからいろいろと話をし、再び練兵が始まるので最後に「それでは西郷先生お別れいたしますが、承らう外国におられ非常に不自由でございませう

う」と云うと「いや、こっちは人は大変親切にしてくれる。何も不自由はない。ただフンドシを売つたらんで困っちゃいます」と云ったというのが記事の内容であった。(「天命を知る」)

②明治二十四年になって西郷生存説が拡まり、鹿児島新聞のそれは「桐野、村田、淵辺等とともに城山陥落の前々夜、重囲を脱して串木野から甕島にわたり、ロシアの軍艦呆号に乗りウラジオストックに上陸、シベリアの一兵営にひそみロシア兵の訓練に従事していた。

明治十七年、十八年の頃、黒田清隆が欧州巡回の際このことを聞き込み、密かに兵営を訪ねて面会した。その時に「二十四年帰朝」を約した。」と報じた。

明治二十四年の「西郷隆盛君生存説」は論説とか識者の意見を寄せ集めたものであった。

③ペトナム逃避説

「西郷さんの息子が日本に来る」との記述を載せた。(「歴史と人物」)

④「此度来日する西洋の船に、西郷隆盛が乗っている。」との電報が香港あたりから数回入り、明治時代の新聞を賑わせた。

⑤フィリッピンの独立運動に暗躍しているとの噂が明治三十年代に拡がった。それはフィリッピンのアギナルド将軍が、米西戦争の結果アメリカの領有となったフィリッピンの自主独立運動を起こしアメリカと戦を始めた時のことである。アギナルドは、初代大統領となった人だが、その現地軍は非常に強く何年もアメリカ軍を苦しめた。そのことから日本で、フィリッピン軍の帷幕に西郷隆盛が居るといふ噂が立った。これはかなり信じられたようで、作家の押川春浪の「新日本島」「武俠艦隊」「東洋武俠団」等が刊行された。後日、アギナルドが「ヨシノボリ」(西郷)と題した小説があることだが、それが欲しい。」と木村毅の友人の外交官に話したことがあり、その友人からこれを聞いた木村は、十余年後にマニラを訪問し、將軍に六冊の古本を贈呈して喜ばれた。

⑥シンガポール亡命説

⑦新潟の新聞で、西郷が生きているか、死んでいるかを懸賞にした。東京でも、それを賭の対象にした。

これと時を同じくして、西南戦争の絵草紙や西郷の肖像がなど大変な売れ行きを示した。

五、風貌の真偽

①写真といっても、西郷の顔を直接撮ったものではないが「似顔絵」の写しがある。それは安政年間に幕府が尊皇攘夷派の人物の、捜査用として検定司発行の人相書きで、右から平野国臣、高杉晋作、西郷隆盛と注記されている。その顔は、あご・口・鼻・額など寸分違わないそっくりの顔と云われるが、作者の名前は判らない。(「大西郷謎の顔」)

②明治二十一年、賊軍の汚名が解除されて、それまで倉庫に隠していた島津氏や大久保・伊藤等と共に撮った「六人の写真」の中に右から二人目が西郷との説があるが、島津家では同じ人物を、全く別人の小田原瑞智としている。

③西郷は、七師亡友への義理から自らの肖像をこの世に残さうとせず発表しないことに努力し、自らの筆跡とともに回収焼却に努めていたと云われる。

④上野の銅像は、明治三十六年に反逆罪が赦されたとき計画され、木彫師高村光雲が鹿児島島の浄光明寺墓地木像にならうて犬を連れた西郷を描いたものであるが、顔の眉と眼は西

郷の死後六年、来朝していたイタリア人キヨソネが描いたものと云われ、また顔の上半は弟徒道から、下半分は大山巖から採り入れたものとも云われる。従って西郷の写真顔ではなく作られた顔である。

除幕に当たって孫子夫人は、「あらよう、宿んしはこげんな人じゃなかった」と云ったと伝えられるが、これは顔のことではなく服装のことを指したものと説もある。顔については、除幕に参列した吉井友美伯、樺山伯等は「よく似ている」と感嘆したと伝えられている。

⑤しかし、「西郷に写真なし」を否定する人もある。写真家上野彦馬は「自分が撮影した人物の一人」と明言し西郷を特記している。その反面写真家下岡蓮杖は「幕末の人物を撮りまくったが、主役たる西郷のものは全くなかった」と云う。

また、島津家、西郷家では「西郷の写真は絶対がない」が結論とされている。

写真ではなく、西郷の姿を描いた人がいる。

床次正精 明治六年陸軍大演習が、千葉県習志野で行われ

たとき、明治天皇に随行した陸軍大將像と上半

身背広像。鹿児島城山麓の原型。

キヨソネ 洋服姿と紋服姿の二点。四人の画のうち最も西郷に似ているという。

石川静正 大正二年、山形県庄内から鹿児島に留学して描く。庄内開拓地本陣に掲げてある。

服部英竜 西郷が日当山温泉に湯治中に描いたもので、上野公園銅像の原型となっている。

なお、銅像建造については、上野公園銅像が明治二十一年、キヨソネ・服部の画像を下敷きに高村光雲が制作。

鹿児島城山麓の銅像は、床次の描いた陸軍大將の画像から、「忠犬ハチ公像」の作者安藤照作となっており、いずれも写真ではなく画像が原点にあった。

⑥明治天皇は、二度に亘って自らの真影を西郷に御下賜になつて、西郷の写真を献上するよう御所望になつたが、西郷は、二度とも「お許し下さい」とこれをお断り申し上げている。西郷の孫吉之助は「天皇の御所望を断るのであれば、祖父（隆盛）の写真は絶対がない」と断言している。

⑦偽りの西郷写真

西南の役の当時「英雄西郷どん」とか「賊将西郷隆盛の真影」等と称して、殊に永山彌一郎なる人物を西郷として売り出され、全国に拡がった。

当時、兵士は西郷の姿を直に見ることが少なかったこともあって、永山を西郷と思い込んだという。その後、大正十五年から昭和四十四年の頃にも再び売り出され、新聞にも利用されたという。西郷写真の出現はまだまだ続いているものと思われる。

(本会顧問)

第四十五回日本吟道全国大会及び

吟行研修会に参加して

洲神会第二 稲葉 誠城

去る十月二十六日(土)から二十八日(月)まで、大分県・豊前豊後路を訪ねての吟行研修会と、別府市ビーコンプラザでの秋季全国大会が盛大に開催された。

好天に恵まれて、一日目は福岡空港から真つぐ憧れの咸宜園へ赴く。近代吟詠発祥の地とされる此処で「桂林莊雜詠諸生に示す」を合吟する。昼食の後、菊池寛作「恩讐の彼方に」で有名になった「青の洞門」を訪ねる。三十余年もの歳月をかけて村民達に捧げた洞窟掘りの作業、僧玄海の執念を覚え感動する。

黄昏迫る頃、中津の福沢諭吉旧邸に至る。二歳で父に死別した諭吉は、大阪から母に連れられ中津に帰り、身分にこだわらず人々に優しく接した母親の感化を受けて、此処で少年期を過ごしたという。資料館で「独立自尊新世紀を迎う」と大書された掛軸に深い感動を覚えた。幕末から明治中期の日本を代表する開明的思想家・教育家「諭吉」の偉大さに触れた思いである。「桂林莊雜詠諸生に示す」と「青の洞門」は、これから一味違った吟詠が出来るぞと思ひながら、別府温泉杉乃井ホテルに旅装を解く。

二十七日(日)大会当日、新装なった別府市・ビーコンプラザは、全国から集まった会員で沸き返っていた。オープニングは、舞台一杯に並んだ大分県会員による「大分県行進曲」の大合唱である。国歌斉唱の後、林緑神副総裁の開会の辞で始まる。国歌斉唱があつて、国旗が無いステージに不自然を覚える。巨匠の叫びは、目かえ無しにシラシラ、シラシラ、シラシラと

第一部叙情の譜で、本会の男性六名が小泉龍泰作「一川」をさぶちゃんの歌を交えて見事に吟じた。女性は、現地参加の北山恵城さん(中町会所属・佐賀県から参加)を加えて十六名が、第六部心の四季で、同じく小泉龍泰作「みだれ髪」を、ひばりの歌をまじえてこれまた見事に吟じた。

いよいよ呼び物の特別番組「雲井はるかに」である。幕開けのトップバッターが、本会女子会員による「湯布山を詠める」だ。先程のピンクのブラウスに、有坂龍煌事業局長肝いりのコサージュが美しく胸に映えて、流れるような短歌が会場を魅了する。

特番も終わりに近く、吟士権者・湊山牙祥さんの登場である。自然の振りに朗唱を交えて、若山牧水の短歌連吟を朗詠された。場内はシーンと静まり返った。

最終日二十八日(月)は、荘厳な宇佐八幡宮を始め、落葉散り敷く古寺・名刹を訪ねた後、大分空港から機上の人となった。本会は、大会当日コンクール集計係であり、ステージ全部を見ることが出来なかったが、参加者全員それぞれ立派に務め得たと思う。車両長として大活躍された山内雄祥さんに心から感謝しながら、吟道の同志として素晴らしい三日間を過ごさせて頂き大変有難うございました。

無詠吟謡歌アソビ

「女 祇王 祇」

新発売 11月30日

吉永典子吹込みテープ

カラオケ付

好評発売中

定価 ￥2,940

お申し込みは、本部まで



詩歌投稿

歌人 田崎秀を讃う

中町会 小泉 龍泰

初夏潮声大洗辺ホトリ

初夏潮声大洗のほとり

田崎偉業向ツチカニエン 誰伝レ

田崎の偉業誰に向かつてか
伝えん

秀歌燦燦トシテル 彰碑表ニ

秀歌燦々として碑表に彰る

結社生々五十年

結社生々たり五十年

仄起式七言絶句
下平声一先韻

田崎秀氏は、義兄の妻の実兄にあたり、歌誌「茨城歌人」の創始者である。医師であったが肺結核を病み、永い闘病生活の間に多くの短歌を世に発表した。記念誌に漢詩を寄せてほしいとのことで、一度はお断わりしようと思つた時、ワールドカップ対ロシア戦で日本が勝利したことを知り、不思議と力が湧いて気がつけば、平仄を合わせている自分がいたのである。

漢詩

讚 法華經

八王子会 脇 成城

言々都是近菩提

言々都是是れ菩提に近づくげんげんすへ

句々漸漸求道梯

句々漸漸求道の梯くくぜんぜんぐどう

六万九千三八四

六万九千三八四

慇懃読誦又偈題

慇懃読誦又偈題いんきん

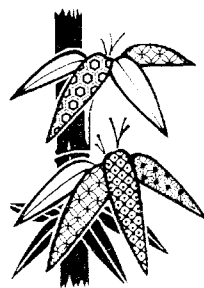
(上平声八齊韻)

。六万九千三八四 法華經全文、六万九千三百八十四文字を言う。

(参考)

南北朝の忠臣、『楠正成公』は、無二の法華經信奉者であり、誠忠無比にして智畧に秀で、学問、信仰も傑出した武将でありました。

怨敵退散の祈願に当り、法華經全巻を書写、その奥書が現に神戸市湊川神社の什宝(国宝)となっています。



編集後記

吉永理事長先生は、本部の行事で多忙を極めておられる中「公報二十九号の巻頭が...」と申し上げたところ「発行が遅れるので余白をつけて発行してください」とおっしゃってくださったのですが、後日、寄稿しますからということで、今回の巻頭を埋めてくださいまして有難うございました。

また、いろいろな行事に参加しながら投稿して下さった方々に心からお礼申し上げます。上村健洋先生には、いつも長編の投稿で紙面を埋めて下さいます。感謝の念でいっぱいですが、公報を発行するに当たって、先ず困るのは投稿者が少ないことです。

どうか委員の皆様、こぞって投稿して下さいようお願い申し上げます。(広報局長)

今年も残りわずかとなり、お忙しい毎日をお過ごしかと拝察いたします。どうかお身体を大切に良いお年をお迎え下さいませ。よう、お祈り申し上げます。(18)

教場めぐり『船橋湊教場』からこんにちわ 船橋湊教場 鈴木昭水さん 記

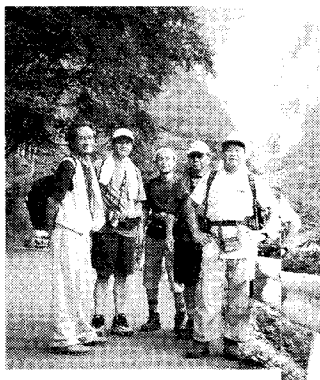
確か平成6年春うらかな頃、齋藤孝祥さん(船橋教場)に詩吟の指導を依頼したところ「まだ未熟で指導出来る立場にない」との返事で断られました。同志6人も集まり一致協力して、教場を育てて行くので何とか考え直して頂けないか、再三にわたり押しの手で口説きおとしたのが事の始まりです。一年後の平成7年8月26日、船橋湊教場は齋藤孝祥先生を指導者に迎え産声をあげました。船橋市中央公民館を拠点に、月曜日午後6時から9時まで稽古に励んでおります。

- 物知りで、雨をも呼んでしまうほどの念力の持ち主。東京生まれも今は色あせた
「シン」ちゃんこと原田真城さん宮本の様かお公家様風貌の「コイ」ちゃんこと小泉則水さん
「ペコ」ちゃんこと三沢利水さん
- 趣味の釣りも今はごぶさたと、どこから見ても教場紅一点で、子育てのことなら何でもお任せの新人ではあるが、ご年輩から若年まで幅広い人の持ち主で、ゴルフ大好きな
「トシ」ちゃんこと御園生利吟さん
- 年の功とやらで、教場のお目付役の
「スー」さんこと鈴木昭水さん

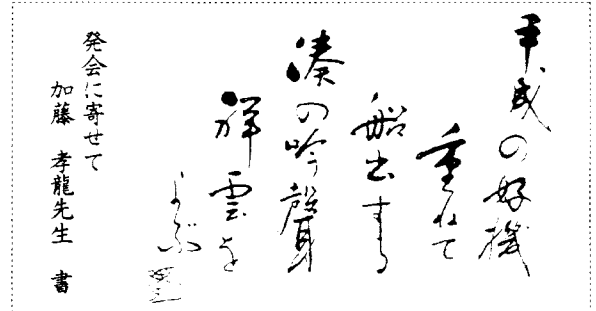
現在、個性あふれる七人衆と指導者の齋藤先生の名で、熱気こもった練習を重ねております。まずは大きな声を出すことを基本にと、吟のステップアップへ会員一同精進しております。

また、年一回の山歩き中心(温泉付き)の親睦旅行も、回を重ねる毎に山歩きの距離がだんだん短くなってきていることが、気がかりでありません。(歳のせいかもネ)

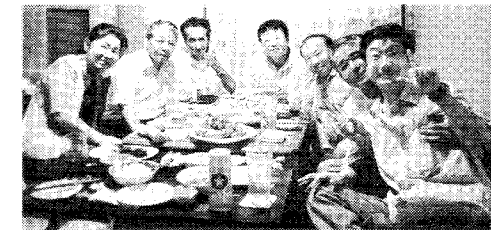
親しい同志と、大きな声を出し、たくさん汗をかき、美しい景色を眺めながら、ゆったりと温泉につかって、おいしい料理でほど良いお酒を飲み交わすこと。これが今、流行の「癒し」の最高峰を味わっているものと自負しております。今後とも、諸先輩方のご指導ご鞭撻よろしくお願いたします。



神代則城さん



次に会員の紹介といたします。



- 釣りと狩猟が趣味の、チャット照れ屋の「オサム」ちゃんこと竹内修城さん
- 以前はゴルフ、今はカメラ持参で山歩き。田舎生まれでも自称都会的センスも備えている「カミ」ちゃんこと神代則城さん